

「集合知授業システム」で歴史授業に取り組む。

札幌市立元町北小学校 教諭 齊藤振一郎

1. 「集合知授業システム」とは

平成25年度の社会科は久しぶりの歴史。全般に言える事だが、社会科は授業するのが難しい。中でも歴史は、教える事が多いので一層大変さが増す。

そこで、どう授業するかを考えた。

できれば、教師が知識を注入するだけの授業にはしたくない。できるだけ、子供たちが自分で調べたり考えたりしながら進めて行きたい。

そうやって様々な本を読んでいた時、次の本に出会った。

T O S S / A d v a n c e 江口儀彦 編著
『子どもが燃える 河田流 歴史討論の授業』 明治図書

この本の中で触れられている、河田孝文先生の「集合知授業システム」。これなら、自分が狙っている授業に近くなりそうに感じた。

この本によると、「集合知授業システム」とは教師が一方的に知識を与える授業では無い。子供たちが持っている知識や調べて得た知識を交流し合う中で、互いの知識を深めていく授業…のようだ。どうやら、子供たち個人の知識で考えさせるのではなく、学級集団全体で交流する事で知識量を増やし、その上で考えさせる授業…らしい。

ここで「のようだ」や「らしい」と書いたのは、この本の中に明確な定義が出てくる訳ではないからだ。だから今後は、上記の私の解釈を基にして話を進める。

ちなみに、明治図書オンラインで「集合知」で検索すると3冊の本がヒットする。その内の1冊は上記の本だ。残りの2冊は以下の通り。

T O S S / A d v a n c e 信藤明秀 編著
『子どもをわしづかみにする教室づくりのヒミツ』 明治図書

河田孝文 著
『あなたの授業力が大変身！ 河田孝文の授業ナビ講座3
河田孝文・授業力の正体を紐解く』 明治図書

興味のある方は読んでみると良いだろう。

2. 自分流「集合知授業システム」の流れ

前述の解釈を基にし、自分なりに「集合知授業システム」の流れを考えてみた。4月段階での流れは以下の通り。

1. 課題を提示する。
例えば、「聖徳太子の行った政治で最も重要なのは何だろう？」のように、その時間で扱う内容に関わる課題を与えた。
2. 資料を調べさせる。
調べる資料としては教科書や資料集、国語辞典（勤務校では高学年教室のある廊下に置かれており、自由に使う事ができる）などを使った。
時間的な制約から、図書室の本は使う事ができなかった。
3. 資料から得た情報を分析させる。
4. 意見を立てさせる。
分析した事を基にし、課題に正対する自分なりの意見を立てさせた。
5. 討論させる。
6. 最終的な意見をまとめさせる。
討論の時間が終わったら、最終的な自分の意見をノートにまとめさせた。

こんな感じの授業を続けていた6月12日（だと思う）。印象深い出来事があった。
この日は指導主事訪問。教頭先生に連れられた指導主事の先生が教室に来た際、偶然にも歴史の授業をしていた。

入ってきた教頭先生も指導主事の先生も驚いた表情だった。2人とも子供たちのノートをしきりとチェックしたり、教室の様子を確認したりしている。

残念ながら、指導主事の先生とお話しする時間は無かった。

だが放課後、教頭先生から話しかけられた。「いい事やってるね」と。

その後、しばらく授業について教頭先生とお話ししたのだが、その中で「あれなら子供たちも調べざるを得ないからね」との発言が教頭先生からあった。最後には、「久しぶりに討論の授業を観た」とも言っていただいた。

この出来事から、方向性は間違っていないという感触を得た。と同時に、問題点も強く感じた。

最大の問題点は、意見を言う子が限定されているという事だ。例えば、聖徳太子の授業の時に意見を述べたのは32名中8名だけだった。全体の25%では、いくら何でも少なすぎるだろう。

そこで実践を見直してみた。すると、上記3～4の流れに問題点があると感じた。

本来、「集合知授業システム」では判らない内容があっても、子供たち相互の関わりの中で判るようになっていくはずだ。ところが、上記3～4の流れでは子供たち相互の関わりが発生しない。個々の子供たちが個人として取り組む感じとなる。そのため、判らない内容が分からないままになってしまうのではないか。

実際、それを裏付けるような発言が子供から出ていた。その子が討論の終わった時に眩

いた言葉を聞くと、冠位十二階が何なのか判らないようだったのだ。

もちろん、資料集には詳しい説明が書いてある。そこを読めば良いのだが、その子は、その資料を見つける事ができなかった。しかも、後で書いてある説明を読ませた時も、書かれている内容を充分には理解できなかった。補足して説明する必要があったのだ。

個々の子供たちが個人として取り組むと、能力差が出てしまい全員が同じ土俵に上がる事ができない。これでは、討論にならないのも当たり前だ。

授業を修正する必要がある。

3. 修正版「集合知授業システム」の流れ

資料を調べる、分析する、意見を立てる、討論する…を1単位時間で行うためには相当に高度な能力が必要となる。悔しい事だが、今の自分の実力では子供をそこまで鍛えるには相当な時間がかかる。6年生の残り期間での達成は難しい。

そこで授業の形を変更する事にした。

教科書では時代毎に大単元が幾つかあり、その大単元を幾つかの小単元に分けてある。そして、その小単元は更に小さな項目に分けられている（大抵、見開き2頁で1項目になっている）。そこで、小単元全体で1個の授業と考え、最後に討論を持ってくるようにした。つまり、

- | |
|--|
| <p>A. 1つ目の小項目について調べ、考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none">a. その小項目を象徴するような資料を提示する。b. その資料を読み取らせる。
※ここで補助資料を提示したり、裏付け資料を見つけさせたりすると更に良かったと思う。
これは次回の実践へ向けた反省点。c. 読み取った事を板書させ、交流させる。d. その時間で判った事をまとめさせる。
※ここまでで1単位時間（＝45分間）。 <p>B. 2つ目の小項目について調べ、考えさせる。
※進め方はAと同じ。
以下、小項目の数だけ繰り返す。</p> <p>C. その小単元の小項目を全て扱い終わったら討論させる。</p> <ul style="list-style-type: none">a. その小単元全体を考えさせるような課題を提示する。b. 課題に対する意見をノートに書かせる。
※必要に応じて追加の資料を調べさせる。c. 意見を板書させ、討論させる。d. 討論の後、学級全体としての傾向を確認する。e. 小単元全体で考えた事をまとめさせる。
※ここまでで1単位時間（＝45分間）。 |
|--|

…という流れだ。

これだと、A～Bの段階で相互交流がなされ、お互いの知識で知識量全体を増量する事ができる。「集合知」の状態になる訳だ。その後で討論に入るため、これまでより討論に参加しやすくなる…と予想される。

江戸時代に入ってから、この修正版で進めてみた。

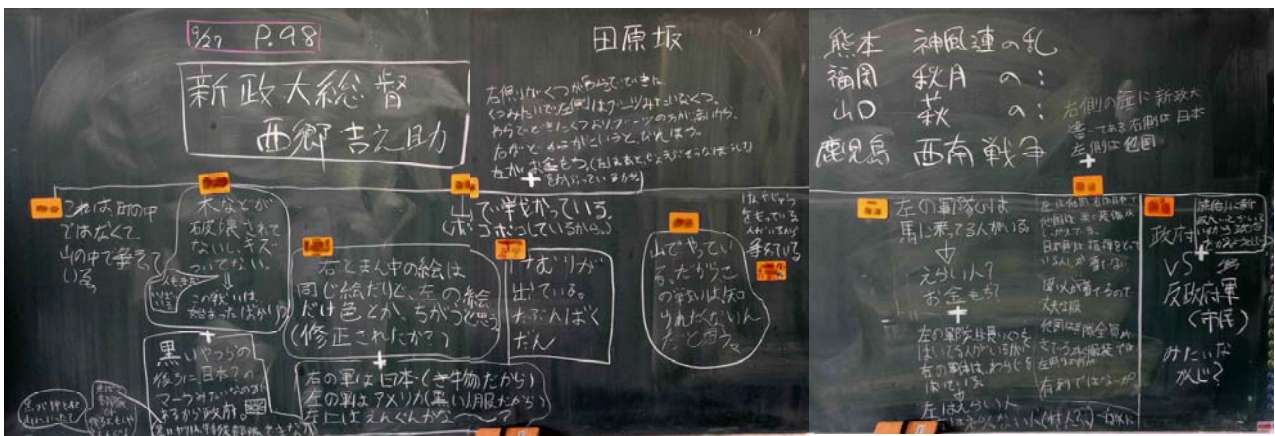
この時、特に気をつけたのがCで出す課題だ。子供たちの意見が出やすく、検討しやすいという事を考え、基本的に課題は二者択一になるようにした。また、子供たちの本気を引き出すため、あえて挑戦的な表現も使うようにした。例えば、

- ・江戸時代の町人と平安時代の貴族、どちらが楽しい人生か？
- ・明治維新において「四民平等」「廃藩置県」「富国強兵」などを急速に押し進めた事は正しかったか？ 間違っていたか？
- ・神風特別攻撃隊は無意味だったのか？ 何か意味はあったのか？

…といった感じだ。

大人感覚や論理では、無茶な比較や失礼と受け止められる内容があるかもしれない。その点は今後の反省点だ。

しかし挑戦的だった事もあってか、子供たちは集中して課題に取り組んでいたと思う。必ずしも意見発表につながった訳では無いが、子供たちのノートを見ると、掘り下げた思考をしようという努力が感じられた。



この写真は、AやBの段階での板書である。日付と教科書の関連頁を左上に書き、子供たちが資料を読み取る時に必要なヒントなども書いていく。ただ、それは極力少なくし、できるだけ黒板全体に子供たちが読み取った事を板書させるようにした。

これは西南戦争に関わる授業の板書だが、10名の子供たちが発表をしている。32名の学級なので全体の30%程であり、これだけを見ると、修正前と比べて大きく発表する子供が増えたとは言えない。

ただ、この子供たちが発表した時に質問したり、意見を述べたりする。その中には板書していない子もいたので、全体としては40%程が発表していた。これだと、修正前より多少は発表する子供が増えたと言えるだろう。

また、その時の資料によって発表する子供は変わってくる。この授業だと、「けむりが出ている」の板書をしている子は普段あまり発表をしない子だ。そういう子も資料によっては発表しようとする。その時、その時で活躍する子は異なるが、小単元全体で見れば多くの子供たちが発表したと言えるように思う。

次頁の写真は、Cの段階で実際に討論をした時の板書である。黒板の中心に課題が書かれ、それを挟んで左側と右側に対立する意見が書かれる。基本的に、左側は肯定的な意見



で右側は否定的な意見だ。意見は子供たちが直接板書し、発表の際に私がポイントとなる事を書き込んでいく…討論は毎回、こんな感じで板書していた。

こちらも10名が板書をしている。この後の討論でも、この10名を中心に意見の遣り取りが行われた。だから、全体の30%程の子供たちで討論は進められたと言える。これは少し残念な結果だった。

討論の場合、自分の意見に自信が無いと発表しにくい。そのため、AやB段階に比べると発表する子供が偏る傾向が強かった。多少自信が無くても発表する子供を育てる…難しいが、今後の大きな課題だろう。もっとノートを活用すると良いのかもしれない。

4. 「集合知授業システム」の発展

1年間実践して思ったのが、やはり歴史の授業は難しい…という事だ。

子供たちには全くと言って良いほど歴史の知識が無いが、討論などをするためには知識が必要となる。そのため、知識を与える(深める)段階が必要になってくる。そこで重要なのが「集合知」となるのだが、私の研究不足、実力不足もあって、今回の実践では十分な展開ができなかった。

ただ、この「集合知授業システム」は歴史に限らず、様々な授業で応用可能と感じる。他の様々な授業でも取り入れていく事で、「集合知授業システム」の経験が増え、より応用範囲が広がっていくだろう。

今後は、歴史の授業に限らず取り入れていき、どの様に展開できるか調べていきたいと考えている。